

フィールド

# 現場でつくる

共同実践の  
五つのフロンティア

矢守克也・宮本 匠 [編]

# 減災学



過疎高齢地域で、高さ30メートル超の大津波からどうやって避難するか  
原発災害による風評被害を、どのように乗り越えるか  
大災害を経た後も、生き生きと充実した生を実現するには

地域特性や直面する課題の異なるさまざまなフィールドで、  
「減災」のあり方そのものを問う、五つのレポート

新曜社

フィールド

# 現場でつくる

共同実践の  
五つのフロンティア

矢守克也・宮本 匠 [編]



# 減災学

## 1章 減災学をつくる 矢守克也

- 1 五つのフロンティアを概観する …… 2
  - 1-1 はじめに 2
  - 1-2 減災社会プロジェクト 2
  - 1-3 個別避難訓練タイムトライアル(2章) 3
  - 1-4 サイエンスする市民(3章) 5
  - 1-5 地域気象情報というコミュニケーション(4章) 6
  - 1-6 被災地の住民がつくる防災教材(5章) 7
  - 1-7 ことばによる減災アクション(6章) 9
  - 1-8 減災学がめざすもの(7章) 10
- 2 「減災」について再考する — そのための三つの視点 …… 11
  - 2-1 プラスチックワード 11
  - 2-2 第一の視点 — コミュニケーション 13
  - 2-3 第二の視点 — ツール 16
  - 2-4 第三の視点 — コンセプト 20
  - 2-5 何のための減災か 23

## 2章 個別避難訓練タイムトライアル 孫 英英

- 1 訓練当事者の主体性を取り戻すには …… 28
- 2 研究フィールドの概要 …… 30
- 3 個別避難訓練と動画カルテ …… 31
  - 3-1 個別避難訓練の実施の流れ 33
  - 3-2 動画カルテの作成 34
- 4 個別避難訓練における「主体性」の回復 …… 35
  - 4-1 Aさんの事例 35
  - 4-2 Bさんの事例 39
  - 4-3 Cさんの事例 41

5 まとめ …… 45

**3章 サイエンスする市民** 矢守克也・岩堀卓弥

1 はじめに …… 50

2 阿武山観測所サイエンス・ミュージアム化構想 …… 52

2-1 始動(2011年度) — 観測施設からアウトリーチの拠点へ 52

2-2 転機(2012年度) — 《阿武山サポーター》の誕生 55

2-3 発展(2013年度以降) — 《サポーター》が自ら、そして外へ 61

3 満点計画学習プログラム …… 65

3-1 「満点計画」とは? 65

3-2 小学生が担う地震観測 67

3-3 満点計画学習プログラム 69

3-4 「担う」ことがもたらすこと 71

3-5 試行錯誤と今後の展望 74

**4章 地域気象情報というコミュニケーション**  
竹之内健介

1 はじめに …… 82

1-1 あなたにとって気象情報はどんなもの? 82

1-2 地域の歴史と減災とのかかわりについて 83

2 地域気象情報とは …… 86

2-1 リスク・コミュニケーションの観点からみた気象情報 86

2-2 地域気象情報に含まれる三つの視点 90

3 伊勢市中島学区での取り組み …… 95

3-1 伊勢市中島学区の地理的特徴 95

3-2 取り組み① — 生活防災 97

3-3 取り組み② — 防災イベント 98

3-4 取り組み③ — 地域気象情報 98

3-5 伊勢市中島学区における現在の取り組み 105

4 地域気象情報がめざす社会のすがた …… 106

## 5章 被災地の住民がつくる防災教材 李 勇昕

1 はじめに …… 110

1-1 複合災害時における判断の難しさ 110

1-2 「住民主体」とは何か 111

2 「クロスロード：大洗編」を導入するまで …… 112

2-1 茨城県大洗町の地理的特徴と被災状況 112

2-2 大洗町の復興に向けた地域の取り組み 113

3 「クロスロード：大洗編」の取り組み …… 116

3-1 「クロスロード」とは何か 116

3-2 「大洗編」の実践 117

3-3 「大洗編」の効果と反響 125

4 「クロスロード：大洗編」の意義 …… 128

4-1 明確化・可視化 129

4-2 共通化・共有化 129

4-3 主体化 130

5 今後に向けて …… 131

## 6章 ことばによる減災アクション 近藤誠司

1 はじめに …… 134

2 ことばの創造力 …… 135

3 「ぼうさい夢トーク」におけることば …… 138

3-1 等身大のことば 138

3-2 科学者である前に人である 141

- 
- 3-3 過去の交絡 — 人としての歩み 143
  - 3-4 未来の交絡 — 夢見ることばたち 146
  - 3-5 当該実践の創造的なポテンシャル 150
  - 4 「KOBE 虹会」におけることば …… 152
    - 4-1 溶け合うことば 152
    - 4-2 現在の交絡 — あるいは、他者との交歓 154
    - 4-3 当該実践の創造的なポテンシャル 161
  - 5 ことばの世界を超えて …… 163

## 7章 減災学がめざすもの 宮本 匠

- 1 防災と減災 …… 166
- 2 孤独死が問いかけたもの …… 168
- 3 減災の主体 …… 170
- 4 減災と復興 …… 173
- 5 「Xがない」問題 …… 177
- 6 減災の主体形成 …… 179
- 7 「めざすかわり」と「すぞすかわり」 …… 184
- 8 本書の結びに …… 187

あとがき  
文 献



---

# 1章 減災学をつくる

---

矢守克也



# 1 五つのフロンティアを概観する

---

## 1-1 はじめに

本章では、本書の内容全体への導入とガイドを兼ねて、二つの作業を行います。

前半（1節）では、この後、2章～6章で紹介する減災学の五つのフロンティア、および、それを受けたまとめの章（7章）の内容について、具体的に、かつ簡単に内容を要約します。「ここがこの章のハイライトです」という形で、私なりのお勧めポイントも示します。それぞれの章は独立して読んでいただけますが、まず、このパートに目を通していただくと、本書の概要についておおまかなイメージをもていただくことができると思います。

後半（2節）では、本書が全体として何をめざしているのかについて示します。このパートでは、近年、「防災」に代わってよく使われるようになった「減災」という言葉や考え方について、「防災から減災へ」というシフト（移行）を基本的には前向きに評価し歓迎しつつも、「減災」の考え方の大前提となっている事柄らについて、敢えて再考してみることにします。具体的には、三つの視点——コミュニケーション、ツール、コンセプト——から減災について深く掘り下げて考えることで、真の「減災学」をつくっていくための道筋をつけてみたいと思います。このため、この後半には少し抽象的な議論も交えますので、その点どうかご理解ください。

## 1-2 減災社会プロジェクト

本書では、私の研究室（京都大学防災研究所矢守研究室）で、この4年間、「減災社会プロジェクト」という看板のもとで進めてきた減災のための実践的な研究を「減災学の五つのフロンティア」として紹介します。なお、「減災社会プロジェクト」は、文部科学省の特別経費による支援を受けた研究プロジェクトで、その正式名称は、「巨大地震津波災害に備える次世代型防災・減災社会形成のための研究事業——先端的防災研究と地域防災活動との相互参画型実践を通して」

という長いものです。

2章～6章では、五つのフロンティアの具体的な内容について述べます。まだ多くの課題を抱えていますし、不十分な点は今後修正していかねばならないことは十二分に自覚しつつも、敢えてフロンティアと銘打ってみました。それは、研究室にゆかりのある若手研究者および学生たちが、それぞれに先駆的かつ挑戦的なことに取り組んでくれているとの自負あつてのことです。

また、五つのフロンティアの舞台となっているフィールドは、地域特性も直面している課題もそれぞれ多種多様です。研究や実践のスタイルもまちまちです。しかし、読者諸賢には、そこに共通する匂いや一貫する哲学のようなものをあわせて感じとっていただけるものと思います。それを文字にしたものが、この1章の後半(2節)、および、「減災学がめざすもの」と題された総まとめの章(7章)だと考えていただければ幸いです。

### 1-3 個別避難訓練タイムトライアル(2章)

2章では、研究室で開発した「個別避難訓練タイムトライアル」という名の、新しい種類の避難訓練を取り上げています。本研究の舞台は、高知県にある四万十町興津地区です。太平洋に面し三方を山に囲まれた、人口約1000人の集落です。南海トラフ巨大地震が発生したときには、大きなゆれと巨大な津波に襲われると想定されている地域でもあります(口絵①)。

さて、避難訓練には多くの人が参加することが多いですが、個人(または家族)で行う点が、この訓練の大きな特徴です。訓練者は、自宅の居間などから高台など避難場所まで実際に逃げてみます。その一部始終を、地元の小学生たちがビデオカメラで撮影します(口絵②)。2台のカメラを用い、1台は逃げる人の表情を、もう1台は周囲の状況を撮影します。さらに別の子どもが、その時々々の状況をメモします。「そろそろ疲れてきた」「ブロック塀が崩れる危険性あり」といった具合です。そして、時計係が避難に要した時間を計ります。

こうした作業をすべて小学生に依頼したのは、訓練を支援すること

自体が絶好の防災学習にもなると考えたからです。また避難する人には、GPS（現在位置を測れる装置）を身につけてもらい、何分後にどこにいたかが後から地図上に表示されます。

以上の結果を、「動画カルテ」と呼ぶ映像にまとめます（口絵③）。画面は4分割されています。左上の画面には1台目のカメラ映像が、右下の画面には2台目のカメラ映像が、右上の画面には訓練者の言葉と子どもたちからのコメントが、そして、左下の画面には上述の地図が映しだされています。画面中央に時計表示があって、四つの画面はスタートからゴールまでずっと連動して動きます。

さらに、この地図には、津波浸水シミュレーションの映像が、訓練者の実際の動きと重なって表示されます（口絵③の、地図の下方から迫ってくる紺色の部分）。だから、たとえば、「ここまで逃げたときに、自宅にはすでに津波が押し寄せてきている、間一髪だった」といったことが一目瞭然でわかります。

これを、「動画カルテ」と呼んだのは、一人ひとりの避難の課題がそこに集約されているからです。医師が患者の状態を個別にカルテに記録するイメージです。これを通じて、住民一人ひとりに寄り添って、本当に逃げられるのか、どこに注意が必要かについて細かく探り、問題解決を図っていこうというねらいが、この取り組みには込められています。

2章で注目いただきたいのは、言うまでもなく「動画カルテ」という映像ツールです。特に、この映像が、専門家と非専門家の共同作業（コミュニケーション）があってはじめてできあがる点が大切です。つまり、一方で、専門家（研究者）が津波浸水シミュレーションを作成する必要があります。このシミュレーションは、今心配されている南海トラフ巨大地震に伴う津波に関する政府発表の想定をもとに、私の研究室の鈴木進吾助教（現所属：防災科学技術研究所）が作成してくれました。他方で、同時に、非専門家（地域住民）が訓練に参加してくれないと、避難行動の記録が地図に描き込めませんし、子どもたちの協力がなければコメントも抜け落ちてしまいます。これでは、「動画カルテ」も画竜点睛を欠くことになります。

## 1-4 サイエンスする市民(3章)

3章では、相互に密接に関連する二つの研究プロジェクトについて紹介します。テーマは、地震学に関するサイエンス・コミュニケーション、つまり、地震学が生み出した知識を広く社会に普及させることです。

前半(3章2節)の舞台は、京都大学防災研究所阿武山観測所です(口絵④)。この観測所は80年以上前に建設され、日本における地震学の草創期に導入された歴史的な地震計が当時の姿のままで多数保存されています。近年、実際の観測拠点が別の場所に移されたこともあって、一時は「役割を終えたのでは」との声もあったこの観測所を、地震学の今を伝えるサイエンスミュージアムとして再生させるプロジェクトが、3章前半のテーマです。

このプロジェクトの背景には、もちろん、東日本大震災の発生があります。当時聞こえてきた、そして今も耳にする、「防災学は社会の役に立っているのか」「地震学はきちんとリスクを伝えてきたのか」——このような反省の弁は、まさに「減災学」の根幹に触れるものだからです。今こそ、科学と社会、あるいは防災の専門家と一般の人とをしっかりとつなぎ直し、両者の関係を根本から再構築することをめざした試みをスタートすべきではないか。そのような思いから展開しているプロジェクトです。現在では、観測所のミュージアム機能、たとえば、来館者に対して提供される地震学に関する基礎レクチャーや地震計の見学ツアーのほとんどを、「阿武山サポーター」と呼ばれるボランティアスタッフが担うまでになっています。

後半(3章3節)で紹介するのは、小学校に最新の地震計を設置して小学生たちが地震観測活動にタッチする活動を扱ったアクションリサーチです。この地震計は、防災研究所地震予知研究センターの飯尾能久教授が中心になって進めている「満点計画」(次世代型稠密地震観測)と呼ばれる研究活動の中核となる機器です。「満点計画」とは、新たに開発された小型・安価で保守の容易な地震計を数多く(万点)に設置して充実した観測網をつくることによって、理想的な、つまり、百点満点の地震観測を行おうという計画です(口絵⑤)。

ところが、大きな問題が一つ。設置場所の確保に苦労しているというのです。この話を聞いて、私は「それなら、学校に置いてはどうか」と思い立ちました。そうすれば、地震研究者は設置場所を確保できるし、地震計の保守やデータ回収作業も省力化できる。これらの作業は、小学生にも十分担うことができる程度にまで簡素化されているからです。他方で、学校側にとっても、「満点計画」は、お定まりの避難訓練に代表される陳腐な防災教育に新風を吹き込むメリットがあります。「理科離れ」対策にもなりそうです。これぞ一挙両得の計なりと意気込んだわけです。

3章のポイントは、上で2回使った「担う」という言葉に端的に表現されています。小学生が、これまで研究者（専門家）だけが行ってきた観測活動を、そのほんの一部ではあるけれど「担う」こと、あるいは、地震学の素人、つまり「阿武山サポーター」が、観測所のミュージアム機能を「担う」こと——こうした「担う」活動こそが、専門家（玄人）と非専門家（素人）との関係や、両者の間のリスク・コミュニケーションのあり方を、その基盤部分から変革していくことにつながります。

## 1-5 地域気象情報というコミュニケーション(4章)

4章では、気象災害を取り扱います。キーワードは、「地域気象情報」です。「××川が氾濫注意水位に達しました」のような、素人にはよくわからない（ことが多い）情報ではなく、「××橋のオレンジの線まで水位が上がっています」のように、素人（地域住民）が日頃から見慣れている事गरらを利用した気象情報を、地域住民、地元行政、さらに気象や河川の専門家が共同でつくること（「地域気象情報の共同構築」と呼ばれます）が当座の目標です。その上で、地域気象情報を用いて、洪水、土砂災害などの気象災害の軽減をめざそうというわけです。具体的には、三重県伊勢市を流れる宮川流域の中島学区をフィールドとして、これまでにないタイプの新しい気象情報、つまり、「地域気象情報」を生み出すための事前の基礎調査と、地域気象情報を共同でつくるためのワークショップなどが行われてきました。4章では、

その様子について報告します。

さて、現在、気象情報やそれと連動した避難情報の分野では、急速に情報の高度化・迅速化・体系化が進んでいます。そういえば、わずか数年の間に、ずいぶんと新しい情報が世に出てきました。たとえば、「記録的短時間大雨情報」「特別警報」「避難準備情報」「タイムライン」—— これらについて、その意味するところを正確に理解し、実際に使いこなすことができる人（特に、素人）が、いったいどのくらいいるかと問うてみますと、ちょっと悲観的な気持ちにもなります。そして、このことが、気象災害情報をめぐる社会的な課題——たとえば、「正常性バイアス」や「情報待ち」による避難の遅れ、「空振り・見逃し」をめぐって専門家や行政と地域住民との間で生じがちな相互不信や批判合戦など——の一因になっています。

4章の注目点は、もちろん、これまでにはない新しい気象情報、すなわち、「地域気象情報」です。「地域気象情報」は、従来、気象関連情報の作成・伝達を一手に担っていた専門家たち（たとえば、気象庁や河川管理者）から発表される従来型の情報（たとえば、「大雨警報」や河川水位情報）だけでなく、これまで、こうした情報の受け手（消費者）としてのみ位置づけられていた地域住民が自らも関与して生み出す情報（口絵⑥、⑦）です。この点に十分留意していただきたいと思います。しかも、単に、これら二つの情報（専門家発の情報と地域住民由来の情報）を併用するのではなく、両者の対応関係を関係する当事者たちが密に「コミュニケーション」しながら共同でチェックする点、かつ、相互チェックをもとにして、最終的な情報表現についても両者が共同で検討しようとしている点が大きな特徴です。

## 1-6 被災地の住民がつくる防災教材(5章)

5章の舞台は、茨城県大洗町です。大洗町は、東日本大震災を引き起こした地震・津波で大きな被害を受け、原発事故に伴う風評被害にも悩まされてきた町です。5章では、この町で実施したフィールド調査やワークショップを中核とする長期にわたる実践的研究の成果について報告します。具体的には、阪神・淡路大震災をきっかけに私たち

が開発した防災教材（ゲーム）「クロスロード」の枠組みを活用して、大洗町の住民が自らの被災体験や復旧・復興の過程で出会った出来事をもとに、「クロスロード：大洗編」を作成した実践についてレポートします（口絵⑧）。「クロスロード」がどのような「ゲーム」なのかということについては、5章3-1節（116ページ）を参照ください。

「クロスロード：大洗編」に収録された設問を少しだけ紹介しましょう。「あなたは消防団員。大地震が発生し、津波警報も出た。沿岸部で車の避難誘導をしている最中に、20分後に津波が到達するという情報を受けた。先に避難するか？ それとも、避難誘導を続けるか？ ⇒ YES 避難する NO 誘導を続ける」「あなたは漁師。現地の漁業は原発事故により風評被害を受けている。Facebookで情報発信して安全性をアピールしようと思うが、かえって風評被害を大きくしてしまう恐れもありそう。あなたはどうする？ ⇒ YES 情報発信する NO 情報発信しない」。

これらは二つとも、大洗町の住民が実際に自分で経験したことを、経験者自身が設問化したものです。「クロスロード」は、このような、実話に基づく二者択一型の困難な選択場面について、関係する多様な当事者——地域住民はもちろん、行政職員、外部からの支援者、マスメディアの関係者など含めて——が話し合うことを通じて、防災・減災や復旧・復興をめぐる課題に関する情報共有や問題解決を図ろうとするコミュニケーション重視の教材です。

5章で注目いただきたいのは、「クロスロード：大洗編」では、これまでの「クロスロード」とは異なり、体験者自らが減災のためのツールづくりに深く関与している点です。設問自体を体験者自身が作成したことは先述のとおりです（これまでは、体験者への聞き取りをベースにしながらも、主として研究者が設問を作成していました）。さらに、「クロスロード：大洗編」には、体験者自身が画面に登場する解説ビデオ（「復考大洗——あの日あの時の本人解説動画」）という新基軸も導入しました。つまり、既存の「クロスロード」を含めて、減災活動のための従来のツールは、ふつう、災害を経験した人（たとえば、被災者）、ツールをつくった人（たとえば、研究者）、ツールの使

用者（たとえば、未来の災害に備えようとする人）はそれぞれ別の人という構図のもとで利用されてきました。これに対して、「クロスロード：大洗編」では、これら三者がすべて重なりあっているのです。

## 1-7 ことばによる減災アクション(6章)

6章では、「ことばによる減災アクション」が2例紹介されます。これらの取り組みでは、命を救うための何らかのツールをつくったり、訓練をしたり、改善をしたり……、そうしたことは一切行われていません。とことん「ことば」にこだわってみる。たったそれだけのアプローチから、新機軸を切り開いていこうとしています。

前半では、「ぼうさい夢トーク」というラジオ番組の制作を通して、従来の“防災業界”が取りこぼしてきた「ことばの可能性」を探っています（口絵⑩）。このラジオ番組では、防災に携わる科学者たちに連続的にロングインタビューを行なっています。そこでは、科学者になる前のこと（過去）、いま向き合っていること（現在）、将来の夢（未来）を、セットで丹念に聞き出しています。

キーワードは、「等身大の／人として」。科学者である前にひとりの人として、語ってもらう。その「ことば」のうちに「人となり」もあらわれる。これらのことをすべて含み込んだ中で、科学の営みの本源に迫ろうという試みです。「知見」やら「情報」やらとして切断された無謬の科学ではなくて、血の通った「社会の中の科学」を実感することから、ポスト3.11にふさわしい真の「リスク・コミュニケーション」を取り結んでいこうとしています。

後半は、「KOBE 虹会」というユニークなグループ——正確には「場」と表現したほうが適切でしょう——の紹介です。行政職員、報道従事者、NPOや防災組織のメンバー、大学教員や学生など、さまざまなバックボーンをもった人びとが、防災の未来を考える「場」を共有すること、ただそれだけによって9年余りもつながってきたことが報告されています。そこでは、新たな「ことばの可能性」も生まれています。言いたいことが言える関係性から、言いたいことがわかりあえる関係性に。そしておそらく、言わなくてもわかる関係性さえも



予期させる「共同性」の醸成がはじまっています。ここでも、「教訓」やら「要諦」やらとして切断された余所ゆきの防災を、もう一度私たちの掌中に取り戻していくことが企図されています。「そうそう、それ、そういうことだよ！」——ぜひ、読者のあなたにも、膝を打って得心していただきたいと思います。

「ことばによる減災アクション」は、もちろん、ことばだけによるアクションを志向しているわけではありません。逆に、ことばの限界に対してきわめて自覚的であろうとしています。その上でなお、ことばに賭けるという意図的な選択をしています。この切実なる問いかけが、最終章である7章へと架橋されていきます。

## 1-8 減災学がめざすもの(7章)

7章では、この本のまとめとして、減災学がめざすものは何なのかが示されます。テーマは、減災の「主体」形成です。はじめに、減災が、災害直後の生き死にだけでなく、そもそもその人がどのように生きているのかという生にも着目した概念であったことが、阪神・淡路大震災の「孤独死」の例から確認されます。そこから、減災がめざすものとは、災害直後の生き死にを対象とするだけではない、生き生きと充実した生の実現であること、そのような生の実現には、まずは主体性の獲得が大切であること、そして主体性の獲得には、互いをかけがえのない存在として認め合うような双方向的な関係が大切ではないかと提案されます。実はこの本の中で取り上げられた減災のフロンティアで繰り返し問われてきたことは、この減災の「主体」の問題だったのです。

ここで重要なのは、主体が誰かということだけではないことです。それなら、これまでも繰り返し、「住民主体の減災を」というように訴えられてきたものです。この本がテーマとしたい減災の主体の問題とは、誰が主体であるかと同時に、誰が主体になり得ているか、誰が主体的な主体としてなり得ているのかという問題です。減災の「主体になる」ことの運動論こそが、それぞれのフロンティアで実践的に問われていたのです。当事者が減災の主体に十分になり得ていないとき、

いわば減災の主体が不在の時に、どれだけすばらしい制度や技術、支援が存在しても、それらはかえって当事者の無力感や依存性を強めてしまいます。

では、減災の主体が不在の時に、どのように当事者が主体となり得るのか、それをどのように私たちは支えることができるのか、7章ではそのヒントを、減災という言葉と期を同じくして問われるようになったもう一つの言葉、「復興」の現場に探ります。主体不在の問題は、まさに「復興」においても同様の課題として浮上するからです。そして、復興支援において復興の主体が形成された過程をつぶさにみながら、減災の主体が不在の時に、なぜ減災を支援することがかえって事態を悪化させてしまうのか、そのような時どのようなアプローチが減災の主体形成を促すのかが、「めざす」かかわりと、「すごす」かかわりという二つのキーワードから解き明かされます。

## 2 「減災」について再考する — そのための三つの視点

.....

### 2-1 プラスチックワード

「プラスチックワード」という言葉があります。ドイツの言語学者ペルクゼンが提案した用語です。それは、言葉を使っている本人がその意味を十分に理解できていないにもかかわらず、「新しさ」のオーラを発し、多くの人を沈黙させ納得させてしまうような言葉を指します(図 1-1)。ペルクゼンは、本書でもしばしば登場する「コミュニケーション」「アイデンティティ」をはじめ、「消費」「構造」「進歩」といった言葉を、プラスチックワードの代表例として分析しています。

本書の中心テーマである「減災」も、その一つではないでしょうか。つまり、ここ数十年、いや、もう少し厳密に定義するならば、1995年の阪神・淡路大震災以降、「防災から減災へ」の掛け声とともに、日本社会では防災に対する考え方に大きな変化が生じたと言えます。この変化は、他にも、「被害抑止から被害軽減へ」「トップダウンからボトムアップの減災へ」「ハードウェア中心の防災からハードウェアとソフトウェアを併用した総合的な防災へ」といった、多くのプラス

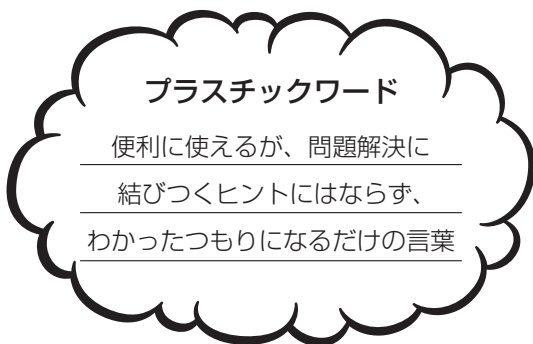


図 1-1 プラスチックワードとは

チックワード — この場合、「プラスチック・フレーズ」と呼ぶべきかもしれません — とともに語られてきました。

今、こうしたプラスチックワード（プラスチック・フレーズ）群で表現できるような変化が生じているとの事実認識は正しいと私も思います。同時に、こうした変化は大筋として望ましい方向を向いた変化だと考えています。しかし、その上で、大将格、本家本元の「減災」を筆頭に、防災ならぬ「減災」の分野は、あまりに多くのプラスチックワードに充ち満ちていないでしょうか。たとえば、本書でも取り上げる「リスク・コミュニケーション」「アウトリーチ」「ハザードマップ（防災マップ）」「空振り・見逃し」をはじめ、「正常性バイアス」「防災意識」「自助・共助・公助」「心のケア」「PTSD／トラウマ」、そして、最新の「レジリエンス」まで、あるわあるわ、です。

そのために、「減災」という営み全体が、何となくわかった気になっているけど、突き詰めて考えると、これまで「防災」という言葉で表現されていた活動と何が異なるのか、どこに本質的な違いがあるのか、十分に明らかにされないままに放置されている疑いがあります。上記の言葉たちは、減災という活動を社会の中で実際に推進するためのキャッチフレーズとして、役に立っている面もちろん多々あります。それはたしかです。しかし、そうであるがゆえに、よくよく検討されることもなく当たり前に使われてしまってもいます。でも、「減災学」

を標榜するからには、こうした言葉についてももう少し精緻で慎重な分析作業が必要になる——これが本書の立場です。

また、この分析作業は、単に学問の世界でだけ重要なのではなく、実践的にもとても大切です。本書の眼目は、減災学の「フロンティア」を紹介することですが、「フロンティア」が、真のフロンティア（最前線）であるためには、つまり、偽物（まがい物）のフロンティアではないことを証明するためには、フロンティアで展開されている取り組みが、一昔前（仮に、「防災の時代」と呼んでおきましょう）にも散見された類似品とは異なること、まさに「減災の時代」にふさわしい新しい取り組みであることを示すことが必要です。そのためにも、たとえば、「リスク・コミュニケーション」というプラスチックワードに厳密な定義を与え、これらの言葉が前提にしている当たり前を疑っておく必要があるのです。

「減災」という本家本元の言葉を取り上げると、議論が一般的、抽象的になり過ぎるので、ここでは、「減災」を下支えしている三つの要素——コミュニケーション、ツール、コンセプト——から、代表的なプラスチックワードをいくつか取り上げ、「減災」を支えている当たり前群について検証してみましょう。その検証作業を通して、「減災学」をつくっていくための道筋をつけてみたいと思います。読者は、おそらく、本書の2章～6章で紹介する五つのフロンティアが、単なる思いつきで選ばれたバラバラな取り組みとしてあるのではなく、一貫した哲学のもとに相互に連携して展開されていることにお気づきになるでしょう。

## 2-2 第一の視点——コミュニケーション

減災のための取り組みでは、「コミュニケーションが重要だ」としばしば指摘されます。たとえば、新しい気象情報の意味が避難情報を出す自治体職員によく理解されていなかったことが露呈すると、「気象の専門家と行政職員との間のコミュニケーションに不備があった」などと総括されることが常です。また、玄人の間ではある程度知られていた事実が、素人には常識でも何でもなく、むしろ青天の霹靂だっ